

《書評》

「希望」という名の知的投資

白川昌生『美術、市場、地域通貨をめぐる』

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター/総合研究大学院大学)

本当の思想書というのは、本書のような著作にこそ与えられるべき名前だろう。一般の読書市場では、功なり名を遂げた藝術家の精神論や藝談、口当たりのよいエッセイばかりが持て囃され、他方で思想とよばれる営みは、大学の講壇哲学の象牙の塔のなかに自閉している。こうした日本社会の閉塞状態に苛立ちながら、受け皿となる読者もたいして期待できないままに、ひとり強靱で粘着力ある思索を続けてきた希有な存在が、白川昌生だった。一般にこの国で思想といえば、欧米や隣国からの最新流行輸入専業と同業者内部での自慰的流通という、閉じた回路で自足していて、学生紛争終息から20年来このかた、一般社会からは、世間知らずの学者先生のご酔狂として、すっかり無視される有り様となってきた。また藝術家と呼ばれる人々は、商業的あるいは世俗的名声に包まれて画商や事業主からチャホヤされるか、反対に世間に認められぬ僻みから反権力を自称したり、革命の片棒担ぎに熱中したり、といった政治の季節の終焉とともに、あいもかわらず美術団体と称する派閥のムラ政治の離合集散に現を抜かすか、さもなくば職業として生計を得ることとは無縁の孤独な制作のうちに閉じこもることが多かった。本書の著者、白川昌生は、かたや学者先生の慰み物で終わりがちだった哲学的考察を、今日を生きる藝術家の営みへと結び付け、かたや藝術家が自らの社会的存在の根拠を問い詰めるといった、とかく出版界や美術界からは相手に

されない営みに、おそろしく生真面目に挑戦してきた。社会へと発言することをやめて久しい哲学と、景気の動向次第で右往左往する底の浅い美術市場との、不毛な断絶関係を強引にもたったひとりで結び付ける、その猛勉ぶり、この国の文化の行方に警鐘を鳴らす突き詰めた洞察の緊張感。その高密度の達成を言祝ぎつつも、ふと翻って不安になる。どうしてこの国には、こうした思索が、これほどまでに稀なのだろうか。

そもそも藝術家と呼ばれる存在は、職人の身分を離れ、また王侯貴族による庇護も期待できなくなって以来、社会管理システムの管理外に余剰として点滅し、資本主義的生産効率の追求とは、定義からして反りが合わず、いわば社会の外れものであるからこそ、自分たちの生存や生産物を許容したり拒絶したりする社会の、鋭敏な観察者にして批判者たることを期待されてよい存在だったのではないか。西欧社会には、そうしたいわば「変質者」としての藝術家を飼育するだけの余裕ある市民社会が成熟し、相互批判や論争を介してあらたな価値観の創出と市場認知がまがりなりにも機能している現実を、白川はそのデュッセルドルフ滞在から、体験として知っている。これに対して日本の現状はといえば、栄達した藝術家は、物故者も現存者も、「アート」と呼ばれる営利産業の客寄せパンダでしかなく、作品制作も流通機構との相関のなかでほぼ完璧に制御されている。60年代ならば既存の体制に反旗を翻すことが、前衛としての

意思表示として、社会的にも評価を得たが、そうした社会の流動性は、こと美術業界に関していえば、70年の大阪万国博覧会によって体制へと組み込まれ、終止符を打たれた。惰性としてのバブル経済期の投機的散財がパンクして、エア・ポケット状態に陥った業界は、巨大資本による鳴り物入り興業を別として、行政主導の施策では、理念なき入れ物ばかりが幽霊屋敷よろしく集客率の低迷を託ち、市場原理以下の世界では、貸しギャラリーという日本独特のシステムが、土建業者的な性格から脱皮できずに、将来性にも不安を抱え、先細り気味の閉塞状態を悪化させている。

白川が自分に課した問いとは、マイナー作家としての存立、という難題だ。メイジャーと呼ばれる作家たちとは異なり、専属契約を持たず、国際展に招待されることもなく、作品生産が職業として成立することもない存在。また特定の美術団体に属してその党派的庇護のもとで権威と権限とを維持する選択をも自らに禁じた立場で活動が続ける、という覚悟である。既存の美術市場には組み込まれず、そこでの価格設定にも抵抗することは、いわば支配的な流通言語やグローバル・スタンダードとの断絶をみずからに課すことであり、それは従って代替的な流通機構を自前で構築し、そのなかで自分の作品に商品（ならざるもの）としての交換価値を付与させる試みとなる。これがここ1年ほどにわかに話題となりはじめた地域貨幣の議論と重なってしまったのは、むしろ白川にとっては不幸だったかもしれない。だが普遍的な資本への対抗措置として、柄谷行人らがマルクスの提唱したアソシエーションに溯るかたわらで、白川は「信頼」や「連帯」の「共同組合」のかなた、あるいはそれ以前に、シュタイナー／ボイスから得た示唆を媒介に、社会の循環器系としての「友愛」を重視し、ブルードンへの回帰を訴える。そこには顧客と藝術家とのあいだに作品を媒介とした直接的な人間関係が成立しない、日本の美術市場の取引

慣習への素朴な違和感があり、自己プロモーションの地獄行脚へと堕してしまう国際藝術家の商品化に対抗して、美術による地域社会への奉仕を再認識しようとする白川の姿勢がある。また大資本が演出するスペクタクルが、結局は商品の販売促進か消費者の洗脳に狂奔する環境にあつて、無賃奉仕を賃金労働へと換算しつつ還元するのではなく、反対に「労働」概念そのものを、価格評定不能な余剰にまで拡大し、「負の利子」のもつ贈与価値を商品経済の論理から切断し、解放しようとする白川は、この管理体制からの「無関係」に別種の「前衛」性を見だし、長らく「自律」の幻想に浸ってきた藝術の社会的機能を再定義する。ここで白川が夢想する藝術の機能が、『不平等の再検討』でアマルティア・センの提唱する、所得とは別の「潜在能力」による社会福祉論と一脈通づることは、本書第5章にも明らかだ。

ここから、本書は日本社会の改造にむけての具体的な提言を紡ぎだす。日本の非営利組織（NPO）は結局は公共サービスという仮面を被った官僚組織の自己正当化にすぎず、税制上、個人による寄付金所得税控除の配慮が脆弱なことが、非営利組織の発展を阻害していること。本来の第3セクターとは、公務員の経営する民間事業ではなく、民間事業者の経営する公共事業へと変質すべきこと。それには、日本の「公共」になお根強い、官尊民卑の発想からの転換も——それが可能かどうかはさておき——不可避だろう。白川の出身地にも近い博多の中心街での「町を美術館にしよう」という運動に対して、メイジャーな美術館の出店レストラン的発想ではなく、あくまで地域の「屋台」に固執するあたり、上意下達、官庁主導に顔かない白川の、首根っこの強靱さが見て取れる。売り筋の作家の金儲けコンサルタントに成り下がった美術評論家に敢然と異を唱えた白川は、ピエール・ブルデューを読破して、美術という社会的象徴資本の分析に果敢に挑戦した。ちなみに、

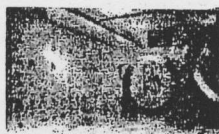
先日物故したが、日本では一般にはまったく注目されず、大新聞に追悼記事ひとつでなかったこの社会学者は、欧米ではマイナーな地位を余儀なくされている多くの藝術家たちにとって、自分たちの「悲惨」を客観的に分析する道具として、盛んに活用されているが、その同類項は日本には白川ただ一人。

金融グローバル化と地球を覆うマネー・ゲームによって、美術作品は暴力的にして犯罪的なまでの世界的な財貨の不均衡配分、つまり貧富の構造格差を、助長しながら我が身を肥やす、怪物じみたクラインの壺と化してきた。この「暴力的行為と美的感動とのあいだを取り持つ」美術市場の構造にも無自覚に、自己の栄達や苦境に自己陶醉する藝術家へ、そしてこの弱者排除の構図のなかで自己正当化を図る企業メセナへの白川の舌鋒は鋭い。さらに自己言及の自己組織により不可逆的な増殖を続けて世界を覆い尽くして行く利潤追求の理念に対して、白川の「友愛」の発想は、フリーエの「情念系列」と結び付き、賃金の対価を得る労働観に対して、愛すべき労働の復権を要求する。公共性の育成と社会調和を促進させる愛の労働のありかたが、人類学者ミッシェル・パノフの描くニューブリテン島エマンガでの農作業のなかに探られる。そのいっぽうで、支配的市場のアウトサイダーと認知されることで支配的市場の正統性確立にかえて加担してしまう愚を犯すことなく、むしろ支配的市場での消費財とはなりえない「食えなさ」にこそ、白川はマイノリティ・藝術の、あるべき異議申し立ての形態を見る。国家―資本―国民という三位一体の韌帯があちこちで綻び目を見せ始めている今日、そこにファロスのなまを築く時代錯誤の代わりに、みえざる地下茎のようなネットワークを張り巡らせる。上昇志向の「職業倫理」(マックス・ヴェーバー)ではなく、夏目漱石の説く「道楽」へと退却することに、かえて積極的な可能性を探ってみせ。諫早湾の河口堰にも見られるように、

形式的には文句のつけようのない審議会を手段に、決定を先送りにして責任を回避し、自己保身をまっとうする官僚組織の、倒錯した職業倫理。道楽とは、そうした機構から逃走し、権威、支配、秩序などから「逸脱する自由」を確保することだ。そうした道楽と放蕩に、見えざる投資がなされて初めて、社会はある種の成熟を回復する。この図式が、かたや山口昌男の『「敗者」の精神史』の描く明治落ちこぼれ集団の軌跡をなぞり、かたやドゥルーズの偶然性の哲学との親近性を発揮し、はたまた「道楽」の樂が、社会的規範からの一時的な解放区たる、中世の「楽」に通づる(網野善彦)とするのは、いささか着き過ぎにも見えよう。しかし、ジョルジュ・バタイユを踏まえてか、「漱石の言う「道楽」は、「世間」の間の中につかりこんでゆくための供儀」とまで見切る白川の眼差しは、あくまで冷徹だ。藝術家たるもの、その作品の「反響が物質的報酬となつて現れない以上は、餓死するより外は仕方がない」。この現実を直視しつつ、本書はそこにむしろ積極的な「希望」を託す。

日本で藝術家という、職業でも道楽でもない境涯を選ぶ居心地の悪さを、日本脱出を自らに禁じて、突き詰めて問い直した本書。売れっ子になることを自ら禁じ手にした白川の著作は、この国の一般の市場では、反響もなく黙殺されることを最初から覚悟している。だがそれが、日本の地域市場の

水面下に、見えざる知的投資として浸透することを評者は期待する。



美術、市場、
地域通貨をめぐる
白川昌生

*白川昌生『美術、市場、地域通貨をめぐる』、水声社、2001、総260ページ、2800円